ユニバーサルデザイン研究部会

SDGs時代のユニバーサルデザイン

UDの読み方をアップデートする

部会長 似内 志朗
にたない しろう

ファシリティデザインラボ代表
認定ファシリティマネジャー

ユニバーサルデザイン（以下 UD）について「尊厳」の観点から改めて考える。

- UD は、いったい何のために必要なのか　→なるべく多くの人が使えるようにするため　→なぜ、なるべく多くの人が使えることが必要なのか　→使えない人にとって不便だから　→使えない人が使えるモノは、すべての人にとってより使いやすいから　→使えない人を排除するのは社会的損失だから　→使えない人の尊厳を傷つけるから
- なぜ尊厳が傷つくのか　→使える人と使えない人を分けてしまうから（差別が生まれる）　→使えないことは、その人の責任じゃない（障がい、高齢、怪我・病気、言語、性差・・）　→社会の側が使う人に合わせるべき（医療モデル＜社会モデル）　→ UD はモノの側の敷居を低くする　→多くの人が使える（排除される人が少ない）社会の実現
- なぜ「思いやり」「やさしさ」という言葉がよく使われるのか　→ UD はモノの側（社会の側）の敷居を下げること（＝社会モデル）　→しかし容易ではない（新築はよいが、既存改善は難しくコストもかかる）　→ハードの不足をソフト（オペレーション）でカバーするしかない　→ここに「思いやり」「やさしさ」という心地よい言葉に頼る構造（公の役割の分担）
- 日本の「思いやり」「やさしさ」は十分か　→欧米と日本の実体験比較では全く不十分（当事者の声）　→障がい者・高齢者への日本人の無関心・手助け不足は問題（街中での車いす利用者への手助け、優先席を譲らない、障がい者の外出が少ない）　→パブリックな場の行動に結びついていない　→「思いやり」「やさしさ」は上下関係をつくりがち　→必要なのは「施し」ではなく、当たり前に使える「権利」と守られるべき「尊厳」

この 2 年、当部会では生活環境・企画設計工房（主宰：森山政与志）と協働で、等身大の UD に一旦立ち戻るという趣旨で「UD ナイトトーク」を計 17 回行った。障害を持つ建築士である森山政与志氏が中心となり、障害の当事者、UD に関わりのある建築家・デザイナー・研究者などさまざまな方に話を伺ってきた。そうした中から、改めて「UD は、いったい何のために必要なのか」深く考えさせられたのである。

1985 年に米国の建築家・デザイナーであるロナルド・メイス氏により提唱された UD とは、簡単に言えば「さまざまな人のさまざまな使われ方を想像し、最初からよく考えて設計・デザインしておくこと」である。一方、UD 提唱から 40 年近く経ち、最近は UD という言葉も新鮮味が薄れた感がある。しかし時代は「人フォーカス」へ向かってきた。かつての工業社会で経営資源であった「ヒト・モノ・カネ・情報（FM はモノに含まれる）」の中で「ヒト」が富の源泉となったことは GAFAM を採り上げるまでもなく現代の特徴である。こうした時代にかつてより「人フォーカス」の代表選手であった UD は、現代における役割について見直されても良い。その際にキーとなるのは、「SDGs との関連」「ウェルビーイングとの関連」であろうと考えている。

SDGs では、地球上の「誰一人取り残さない（No one left behind）」を宣言している。SDGs は 2030 年までに持続可能で「よりよい世界」を目指す国際目標であるが、ゴール達成において、弱い立場の人々は取り残されがちである。したがって高い目標へ向かうプロセスにおいて、世界が「包摂（inclusion）」の価値観を共有しはじめている。Inclusive Design とも言われる UD は、まさに SDGs の「ど真ん中」の価値観である。多様な人々を包摂するために「大きな器」として UD は有効である。また近年、健康経営・働き方改革・SDGs などの文脈で「ウェルビーイング」が盛んに言われるようになってきた。個々人にとって身体的・精神的・社会的に健康で幸福な状態を意味するウェルビーイングは、個々人の幸福という人生の究極的な目標そのものであると同時に、「生産性・創造性は働く人のウェルビーイングにより大きく向上する」というエビデンスが認知され、企業経営などにおいても大きな関心事項となった。これらの背景から、UD の新たな役割について、当部会でも取り組んでいきたいと考えている。◀